

期 日 二〇二一年十月九日（土）・十日（日）  
オンライン開催（愛知大学）

# 日本中国学会 第七十三回大会要項

日本中国学会



拝啓

感染症の収束が待ち望まれる日々ですが、会員各位におかれましては、ご清祥のことと存じます。

さて、日本中国学会第七十三回大会を、来る十月九日（土）及び十日（日）の両日にわたり開催いたします。昨年と同様、新型コロナウイルス感染症蔓延の状況に鑑み、Zoomによるオンライン開催となります。これは会員の皆様の健康と安全を守りつつ、学会活動を維持するための、やむを得ぬ措置です。皆様にはご不便、ご面倒をおかけいたしますが、何卒ご理解とご協力を賜りますよう、お願いいたします。

オンライン大会への参加には事前申し込みが必要ですが、参加費のご心配には及びません。日本中国学会のウェブサイトに、期間限定で会員のみがアクセスできる大会特設サイトをリンクします。詳細につきましては、本要項の「オンライン開催について」をご覧ください。オンライン開催は会場に赴かずとも参加可能ですので、ぜひとも多くの会員の皆様のご参加をお願いいたします。

敬具

二〇二一年八月十八日

日本中国学会理事長 大木 康

第七十三回大会準備会代表 白田 真佐子

会員各位

# 日本中国学会第七十三回大会

10月9日(土)～10日(日) 理事会・評議員会は別日程

日 時		行 事	会 場 (Zoom)
7日 (木)	20:00	理事会	オンライン会議 (Zoom) *
8日 (金)	20:00	評議員会	オンライン会議 (Zoom) *
9日 (土)	9:30～9:50	開会式	第二・三会場 Zoom 2
	10:00～11:50	研究発表 (各会場) I. 哲学・思想部会 II. 文学・語学部会	第一会場 Zoom 1 第二会場 Zoom 2
	昼休		
	13:00～14:10	研究発表 (各会場) I. 哲学・思想部会 II. 文学・語学部会	第一会場 Zoom 1 第二会場 Zoom 2
	14:30～15:50	特別講演会	第二・三会場 Zoom 2
	16:00	総会	第二・三会場 Zoom 2
10日 (日)	9:30～12:00	研究発表 (各会場) I. 哲学・思想部会 III. 日本漢文部会	第一会場 Zoom 1 第三会場 Zoom 2
	昼休		
	13:00～15:00	パネル ディスカッション	第二・三会場 Zoom 2
	15:10	閉会式	第二・三会場 Zoom 2

\* 10月7日(木)の理事会および10月8日(金)の評議員会については、10月はじめに学会事務局より参加方法などを当該会員にメールにて連絡いたします。

## 研究発表等の会場・時間帯一覧表

		第一会場	第二会場	第三会場	
		Zoom 1	Zoom 2		
9日 (土)	9:30～9:50	/	【開会式】		
		哲学・ 思想部会	文学・ 語学部会	日本漢文部会	
	10:00～10:30	I-1 (9) 許曉璐	II-1 (18) 湯書華	/	
	10:40～11:10	I-2 (10) 竹宮英朗	II-2 (19) 村田真由	/	
	11:20～11:50	I-3 (11) 熊征	II-3 (20) 浅見洋二	/	
	昼休				
	13:00～13:30	I-4 (12) 西信康	II-4 (21) 西川ゆみ	/	
	13:40～14:10	I-5 (13) 熊奕淞	II-5 (22) 林暁光	/	
	14:30～15:50	/	【特別講演会】(27) 中嶋幹起・瀬戸口律子		
16:00	/	【総会】			
10日 (日)		哲学・ 思想部会	文学・ 語学部会	日本漢文部会	
	9:30～10:00	I-6 (14) 建部良平	/	III-1 (23) 陳竺慧	
	10:10～10:40	I-7 (15) 張瀛子	/	III-2 (24) 上ノ原怜那	
	10:50～11:20	I-8 (16) 韓莉	/	III-3 (25) 武石智典	
	11:30～12:00	I-9 (17) 丁乙	/	III-4 (26) 鈴置拓也	
	昼休				
	13:00～15:00	/	【パネルディスカッション】(29) 津守陽・林麗婷・小川主税・鄭洲		
	15:10	/	【閉会式】		

○オンライン開催のため、発表と発表の間に調整時間を入れてあります。

# 日本中国学会第七十三回大会プログラム

I 哲学・思想部会 第一会場 Zoom1

十月九日(土) 午前

I-1 『列仙伝』の「服薬」と「服丹」について (十時～十時三十分)

許 曉璐 (立命館大学大学院)

司会 亀田 勝見 (福井県立大学)

I-2 王叔和脈訣小考 (十時四十分～十一時十分)

竹宮 英朗 (東京大学大学院)

司会 三鬼 丈知 (大谷大学非常勤講師)

I-3 陶淵明の詩文における楊朱思想の受容について (十一時二十分～十一時五十分)

熊 征 (北海道大学大学院)

司会 釜谷 武志 (神戸大学名誉教授)

十月九日(土) 午後

I-4 懐疑と信仰―上海博物館藏戰楚竹書『鬼神之明』に関する考察― (十三時～十三時三十分)

西 信康 (三重大学)

司会 末永 高康 (広島大学)

I-5 『黄帝四経』における二つの「道」の思想について（十三時四十分～十四時十分）

熊 奕 滋（広島大学大学院）

司会 近藤 浩之（北海道大学）

十月十日（日）午前

I-6 文字探究と社会秩序への関与——段玉裁の論理をめぐって——（九時三十分～十時）

建部 良平（東京大学大学院）

司会 吉田 純（名古屋大学）

I-7 古今対話としての『周礼』学——鄭玄と孫詒讓の「九賦」解釈を中心に——（十時十分～十時四十分）

張 瀛子（東京大学大学院）

司会 池田 秀三（京都大学名誉教授）

I-8 『東西文化及其哲学』再考——生の哲学の展開として（十時五十分～十一時二十分）

韓 莉（関西大学大学院）

司会 中島 隆博（東京大学）

I-9 中国一九二〇・三〇年代における「気韻生動」をめぐる諸言説の再考——「形似」概念との関係を中心に（十一時三十分～十二時）

丁 乙（東京大学大学院）

司会 宇佐美 文理（京都大学）

十月九日(土) 午前

II-1 江戸期における中国戯曲の翻訳——嵐翠子『填詞胡蝶夢』について——(十時～十時三十分)

湯 書華(大阪大学大学院)

司会 小松 謙(京都府立大学)

II-2 「溝壑を填む」ということ——文天祥を中心に——(十時四十分～十一時十分)

村田 真由(大阪大学大学院)

司会 奥野 新太郎(岡山理科大学)

II-3 陸游における田園と国家——「耕織図詩」「諭俗文」を手がかりに(十一時二十分～十一時五十分)

浅見 洋二(大阪大学)

司会 内山 精也(早稲田大学)

十月九日(土) 午後

II-4 江淹「横吹賦」について——先行音楽賦との比較を中心に(十三時～十三時三十分)

西川 ゆみ(志學館大学)

司会 大村 和人(徳島大学)

II-5 漢魏六朝賦における「駢」について(十三時四十分～十四時十分)

林 暁光(大阪大学)

司会 谷口 洋(東京大学)



Ⅲ 日本漢文部会 第三会場 Zoom2

十月十日(日) 午前

Ⅲ-1 題画詞から見た日本近世における填詞の受容について―野村篁園と田能村竹田を中心に― (九時三十分～十時)

陳 竺慧(大阪大学)

司会 萩原 正樹(立命館大学)

Ⅲ-2 文之玄昌自筆の詩文集について (十時十分～十時四十分)

上ノ原 怜那(九州大学大学院)

司会 高津 孝(鹿児島大学)

Ⅲ-3 山鹿流における楠木正成論―山鹿素行と吉田松陰から (十時五十分～十一時二十分)

武石 智典(筑波大学大学院)

司会 小島 毅(東京大学)

Ⅲ-4 二松学舎大学所蔵資料井上哲次郎「支那哲学史」の特徴について―引用書を中心として(十一時三十分～十二時)

鈴置 拓也(二松学舎大学大学院)

司会 陶 徳民(関西大学)

特別講演会 第二・三会場 Zoom2

十月九日（土）午後

現地調査（甘肅省・長崎・琉球など）による言語の研究

——あわせて宣教師・通詞（通事）による資料を考察する（十四時三十分～十五時五十分）

講演

中嶋 幹起（東京外国語大学名誉教授）

コメンテーター

瀬戸口 律子（大東文化大学名誉教授・東京国際大学客員教授）

パネルディスカッション（次世代シンポジウム） 第二・三会場 Zoom2

十月十日（日）午後

北京・上海における恋愛——一九二〇―三〇年代初期の小説を中心に（十三時～十五時）

津守 陽（神戸市外国語大学）

林 麗婷（日本学術振興会外国人特別研究員）

小川 主税（大阪大学大学院）

○鄭 洲（神戸大学大学院）

## 発表要旨

### 第一部会（Ⅰ 哲学・思想部会）

#### I-1 『列仙伝』の「服薬」と「服丹」について

許 曉璐（立命館大学大学院）

『列仙伝』に見える神仙術は、服餌・煉気養形・房中術など様々あるが、そのうち、服餌を用いる仙人の数が最も多い。また、煉気養形・房中術などを行う仙人たちが服餌を同時に取り入れることもあるので、服餌は『列仙伝』の中の基礎となる神仙術と言ってもよいだろう。

「服餌」は神仙術の一つとして、「服薬」と「服丹」との二種類に分けることができる。漢代までの服餌は主に「服薬」を中心としていたとみられるが、草木類の薬の服用では延年できるが不死の仙人になることはできず、晋の葛洪の頃に至ると、金丹が不死の仙人になる最高の方法と考えられるようになった。

『列仙伝』において薬効が明記された薬物は、加工・調和法が明記されていない薬物と明記されているものがある。調和法が明記されていない場合、その薬物をそのまま食べる・服用する可能性が高く、言わば「服薬」の範疇に入る。調和法が明記されている場合、「鍊」・「煉」、「丹」などの煉丹行為と関係する文字が書かれていることがある。それは「服丹」の範疇に入る。

本発表では、『列仙伝』の服餌について、薬物をそのまま食べる・服用する「服薬」と、「鍊」・「煉」という加工を加えてから服用する「服丹」に分けて、薬の仙薬的効果を中心として分析する。また、『列仙伝』の服餌についての「食」と「服」の使い分けを、馬王堆帛書の『五十二病方』・「雜療方」・「養生方」・「却穀食氣」及び『神農本草経』と比較しつつ論じる。さらに、それぞれ『列仙伝』に明記された効果と『神農本草経』などの医書に記された効果とを比較し、『列仙伝』における「服薬」と「服丹」の区別を明らかにしたい。

『王叔和脈訣』（以下『脈訣』）は中医における脈学に関する著作であり、一般的には高陽生が王叔和の名に仮託して著したものとされる。この書は歌訣の形式で王叔和の『脈経』を基とした脈診について論じており、二十四脈を七表、八裏、九道の名目に分けている。折しも、敦煌文献P・三六五五に『七表八里三部脈』（四四―六四行目）及び『青烏子脈訣』（六四―七九行目）と題する文章が見られ、いずれも歌訣の形式で脈について述べており、『王叔和脈訣』の一部の内容と酷似している。

先行研究により、両者とも初唐に書写されたものとされており、『七表八里三部脈』には（名前通り）『脈訣』の「九道」の内容が見られず、『青烏子脈訣』は『脈訣』の「左右手診脈歌」の内容とほぼ一致している。また、『唐書』芸文志に「『青烏子』三卷（中略）蕭吉撰」とあることから、「青烏子」とは即ち蕭吉であることがわかる。蕭吉は『北史』と『隋書』に立伝されており、梁武帝の時の人であり、著作に『帝王養生要方』や『五行大義』などがある。

一方で『脈訣』の著者とされる高陽生はその正体がわかっておらず、或いは六朝、或いは五代の人とされている。これらの手がかりがあるにも関わらず、『脈訣』と敦煌文献P・三六五五の関係について、先行研究では均しく敦煌文献を『脈訣』の早期の伝本の一つだとしている。高陽生が六朝の人であれば『脈訣』↓敦煌文献、五代の人であれば敦煌文献↓『脈訣』という順になる蓋然性が高く、いずれにしても、敦煌文献を早期の伝本と考えるより、それをテキスト形成の一段階という視点から捉えた方が妥当性は増すのではなからうか。

そこで、本報告では、蕭吉の思想の検討及び『脈訣』と敦煌文献の用語の違いを比較分析することを通して、『脈訣』の形成を考察し、先行研究の欠を補うことを試みる。

### I-3 陶淵明の詩文における楊朱思想の受容について

熊征（北海道大学大学院）

陳寅恪氏（一八九〇～一九六九）は、論文「陶淵明之思想與清談之關係」（一九四五年単行本初出、後『金明館叢稿初編』（一九八〇年）に所収）において、嵇康、阮籍らの思想を「旧自然説」とするとともに、陶淵明が「惜生」（道家の希求する長生および儒家の希求する立名という形での長生）を批判したことを踏まえて、その思想を「新自然説」と見なした。いずれも同じ道家思想に由来する「自然説」とするが、嵇康、阮籍と陶淵明とは、その思想のどのような面が相違するのであろうか。本発表では、この問題をめぐって、陶淵明の詩文における楊朱思想の受容という観点から考察する。

陶淵明の詩文において、楊朱の名が見えるのは、「世路廓悠悠、楊朱所以止」（「飲酒」其十九）と「楊公所嘆、豈惟常悲」（五言「答龐參軍」序）の二箇所だけである。しかし、陶淵明の思想、特に死生観と隱逸思想においては、直接的ではないものの、楊朱の思想と通ずるところが数多く見られる。

そのうち、これまでの研究では、死生観について、陶淵明の詩文と『列子』楊朱篇との関わりが指摘され、とりわけ「死」について注目したものは少なくない。これに対して、本発表では、陶淵明の詩文における「生」に着目するとともに、そこで陶淵明が楊朱思想をどのように受容したかについて考察する。具体的には、まず、楊朱が特別に強調した、生命の限界を示す「百年」という語彙の意義について検討する。続いて、楊朱は「久生」の苦を述べながら「速亡」も否定したが、それが陶淵明の詩文における「生」の「自然」のあり方にどのような影響を与えたかについて論ずる。

また、陶淵明の隱逸思想に関しては、従来、老子や莊子との関係性について論じられることが多かったが、本発表では、楊朱の「名」と「実」、「名」と「楽」、「人」と「天下」といったそれぞれの関係性への検討などを通して、楊朱思想が陶淵明の隱逸思想に及ぼした影響を考察する。これらの考察によって、陶淵明の「新自然説」における楊朱思想の重要性を明らかにしたい。

上海博物館藏戰楚竹書『鬼神之明』は、竹簡数にして計五本に過ぎない小篇であるが、その注目度は比較的高い資料であった。その要因としては、伝世文献である『墨子』との間に、用語や内容上の類似が指摘され、これを『墨子』の佚文とする見解が公開当初から提示されたこと、これに加え、『鬼神之明』に「鬼神有所明、有所不明」とある記載が注目され、これが鬼神の能力に対する懐疑を表明する内容と見なされたこと（『上海博物館藏戰國楚竹書（五）』）等を挙げることができる。目下、鬼神の能力への懐疑を表明する『鬼神之明』と、鬼神の能力への信仰を要求する『墨子』明鬼篇や天志篇等との「矛盾」を重視する見解、これに対し、鬼神の能力への懐疑を表明する『墨子』公孟篇等の記載を重視する見解、あるいは、鬼神信仰に一定の留保を与える儒家思想との関係を重視する見解などが提示され、所属学派や『墨子』との関係について、様々な見解が提示されている。加えて近年では、この議論の深まりとともに、所属学派を特定する際の基準そのものを反省する必要も指摘されはじめている。これまた注目すべき研究動向の一つと思われる。

本発表では、両文献に対して指摘される内容上の矛盾や不整合さについて、その問題の所在を検討する。具体的には、信じることと疑うこと、ないしは宗教的説明（あるいは理解）と合理的説明（あるいは理解）とを両極化する発想に問題の所在を見込み、『鬼神之明』の思想をかける発想によって解釈することの妥当性を検証する。これは、『墨子』の解釈についても同様に指摘すべき課題と思われるからである。『鬼神之明』の表現形式に着目し、これを他文献の記載に照合することで、『鬼神之明』に対する新たな解釈を提示したい。

I-5 『黄帝四経』における二つの「道」の思想について

熊 奕 濂（広島大学大学院）

『馬王堆漢墓帛書老子乙本卷前古佚書』（ここでは以下、便宜的に『黄帝四経』と呼んでおく）の『経法』には、「無」を特徴とする『老子』の「道」と、「陰陽・四時・日月などの周期運動が示す理法」としての「天道」といった二つの「道」の思想が並立していることがすでに先行研究により指摘されているが、この二つの「道」の関係についてはいまだ十分な議論がおこなわれていない。この二つの「道」の思想が単に並列しているだけであるのか、それとも両者を一体化するような理論構造がそこに存在しているのかは、『黄帝四経』や『経法』の思想を理解する上で重要なポイントとなろう。この二つの「道」はともに「法」と結び付けて語られており、両者の関係をどのようにとらえるかは、『黄帝四経』の思想の核の一つである「道法思想」の理解に直結するからである。

本発表においては、まず二つの「道」の思想が並立して語られる『経法』の道法篇、名理篇を取り上げて、「天道」としての「道」と「無」の「道」とが、「法」や「形名」とどのように関係しているのかを改めて整理することによって、それぞれの「道」が『黄帝四経』の思想において持つ位置づけを明らかにし、この書の作者（もしくは編纂者）がこの二つの「道」を導入した理由を説明していく。また、両者の「道」の思想が、『黄帝四経』において、単に並列されているのではなく、一体化されていることを示し、この二つの「道」が一体化される論理について『道原』や『十六経』成法篇を中心にした分析を行いながら、「道」や「法」をめぐる『黄帝四経』の思想構造を明らかにしていくことにしたい。さらには、以上の検討から得られた知見を踏まえて、『黄帝四経』のテキストの性質及びその道法思想の成立についても改めて論じていきたいと思う。

本報告では、文字の探究を通して社会秩序への関与を試みた、段玉裁の論理を明らかにする。

清代学術は一定の思想の下で展開していたという議論は、現在の清代学術研究において共有されている。近藤光男、濱口富士雄、木下鉄矢、張寿安などが早期の提唱者であり、ベンジャミン・エルマン編纂の *World Philology* (2010) は、様々な地域と時代に発生した *philology* (非文献学) を、改めて考察すべきであると指摘する。また近年ではオリ・セラが、錢大昕の「儒」としてのアイデンティティを考察している。本報告は、このように活発化する清代学術研究の潮流に追隨するものである。

具体的には「享郷二字釋例」「説文饗字解」「郷飲酒禮與養老之禮名實異同考」(『經韻樓集』卷十一) などの、郷飲酒礼に関する段玉裁の議論を考察する。問題とするのは、①段玉裁がなぜこの議論を重要視したのか、②如何なる論理で議論を展開したのか、である。①の論点となるのは、郷飲酒礼が実は養老之礼の精神を体现しており、孝の徳を教化する上で最も効果的であるという考えである。段玉裁が晩年に、朱熹及びその門人編纂の『小学』に傾倒したことは有名であり、「博陵尹師所賜朱子小學恭跋」にて『論語』学而篇の「弟子入則孝」の条文を強調し、「與黃紹武書」では社会秩序のためには孝弟が重要であると述べる。そしてその教化には養老之礼が肝要であると主張しており、ここに彼が郷飲酒礼に拘った理由がある。

②に関しては「饗」字が重視された点を強調する。段玉裁は『説文解字』の「饗、郷人飲酒也」を出発点とし、文字の創始者倉頡が、郷飲酒礼の重要性を認識していたからこそそ本字が作られたと主張する。その上で様々な文献を用いて郷飲酒礼が如何に重要であるかが論じられており、文字の追及を通して社会秩序に関与するという論理を見出すことができる。

以上を通して、本報告では清代の学者段玉裁が、如何なる思想や論理の下で社会秩序への関与を試みていたのかを明らかにする。



Ⅰ-7 古今対話としての『周礼』学——鄭玄と孫詒讓の「九賦」解釈を中心に——

張 瀛子（東京大学大学院）

本発表では、後漢の鄭玄（一二七年—二〇〇年）と清末の孫詒讓（一八四八年—一九〇八年）の『周礼』『九賦』解釈を考察することにより、儒教経学が如何なる知的営為だったのかについて、報告者の見解を提示することにした。

近代の学問体系が導入される前、中国の儒教思想は経学という形で展開されてきた。経学史上、後漢の鄭玄は諸々の経書を包括することのできる体系的な注釈を初めて作ったことから極めて重要な存在である。鄭玄の注釈は『周礼』を中心に据えたことで知られるが、彼の『周礼』注釈には一つの大きな特徴がある。それは経書の本文のみでは内容が理解できない場合に、鄭玄は、彼が見聞した後漢の物事や制度を用いて解釈したという点である。この「漢制比擬」とも言うべき手法は鄭玄の『周礼』注釈に突出して多く見られ、周の税制にあたる「九賦」を漢代の人頭税としたのはその一例である。理想化された古代である周制と現実世界である漢制の関係を、鄭玄は如何に捉えたのか。この点について、「九賦」解釈の後世における展開にそって考察したい。

宋代に至ると、漢代の学問に対する批判が高まり、「九賦」の鄭玄説にも異議が唱えられた。宋儒によれば、漢代の人頭税は民を苦しめる悪政であり、周公が定めた制度とは認められない。このような宋儒の意見を汲んだのが、清末の孫詒讓の『周礼正義』である。ところが『周礼』を扱った孫詒讓のもう一つの著作には、宋儒と相反する判断が見られる。清代末期、西洋に倣った改革を朝廷に提言するために作られた『周礼政要』では、孫詒讓は「九賦」を漢代の人頭税だと述べるのだが、その理由を明らかにし、彼の『周礼』学を規定しているのは実際には「今」への関心であることを証明したい。

鄭玄と孫詒讓は、経学時代における『周礼』学の始まりと終わりに位置付けられる。彼らの『周礼』学の本質に対する考察は、儒教経学という知的営為を理解する手がかりとなることが期待される。

I-8 『東西文化及其哲学』再考——生の哲学の展開として

韓 莉（関西大学大学院）

『東西文化及其哲学』（一九二二年）は梁漱溟（一八九三—一九八八）が新文化運動期に刊行した作品である。東洋・西洋の文化と哲学のそれぞれの特徴のみならず、東西の社会倫理・政治制度・宗教信仰・経済組織などの諸方面にわたって独特な見識を示しているため、出版後大きな社会的反響を呼び起こしたが、進化論ふう提示された西洋—中国—インドという三段階の文化理論をめぐって多くの批判を受けたことも事実である。

これまで『東西文化及其哲学』の文明観や儒教思想を論じた先行研究は少なくないが、一方、それらの観点を導きだした梁漱溟思想の内的論理についての考察はあまり見られない。

梁漱溟が提示した文化理論は、時代的思潮に合わせた時評的な一面を持つが、個人の生の体験による主観的な知的要素に溢れていることがさらなる特徴なのである。このような文化の視点は、いわば十九世紀に開かれた歴史科学の潮流に反し、人間の内面に向かって文化的発展の原動力を探る文化心理学の手法と共通する面がある。ただ梁漱溟自身が明言しているように、これは人間の知的根源を論じた唯識学の諸理論を所依として発想されたものである。

また「文化的意欲」という論点の提示に絡んで「生」の肯定という梁漱溟の思想にはショーペンハウアーやベルクソンなど「生の哲学」の影響や、「意識の流れ」を提唱したウィリアム・ジェームズの影響も考えられる。さらに、文化論に見られるこれらの思想的諸要素は、本書後半の形而上学を主とする哲学問題、また宗教の必要性の問題などに関する論証にもかかわっており、梁漱溟の思想全体を織りなす重要なモチーフとなっていたことがわかる。

そこで本発表では、唯識学と生の哲学を基調とする梁漱溟思想の検討を通してその仏教から儒教へ、さらに一九二七年以降の郷村建設運動につながる思想的転換の道筋を明らかにすることで、『東西文化及其哲学』が持つ哲学的意義を再考してみたい。

——「形似」概念との関係を中心に

丁 乙（東京大学大学院）

二十世紀前半、西洋文化に対抗し中国の思想的伝統を見直すという文脈において、前近代の絵画論の中核的概念、「氣韻生動」が注目を集め、近代的な解釈を施されてきた。本発表は、一九二〇・三〇年代の代表的な言説を取り上げ、「形似」との関係を中心に、この概念の近代化の一端を検討する。「形似」とは、形態における類似性を意味し、当時の文脈では西洋絵画の写実性を含意する場合が多い。

初期の代表的な用例を示す陳師曾「文人画之価値」（一九二二）では、「氣韻」を作者の「趣味」「感想」「個性」「精神」といった語と同義的に用い、作者に属するものとする。また「氣韻」と「形似」との対立関係を指摘するが、それらはまったく相反するものではなく、後者は前者に至る途中の一段階と捉えている。

それに対し、滕固「氣韻生動略辨」（一九二六）では、「氣韻」を形態の背後にある意義（＝精神）と捉え、外的な「形似」と明確に対置し、両者に対して「二元論的な考察」を行っている。また「氣韻」を単に作者に由来するものとせず、リップスの「感情移入」論を援用しつつ、人間の感情と自然万物の生動との調和・結合によるものと考ええる。

「氣韻」と「形似」が「相容れないもの」であると断言するのは鄧以蛰「氣韻生動」（一九三五）である。彼によれば、「形似」は、すでに加工された芸術的表現であるが、絵画の精神と無関係である。そこでは、「氣韻生動」が絵画表現にある「光」「雲煙」「空虚」「筆墨」に依存しないことが論証されている。そして「氣韻」の在処が芸術鑑賞の活動にあることを、芸術作品に関する創作と鑑賞を区分して論じている。

以上の議論の発展からみれば、前近代の絵画論の資料への検討が深まったことがある一方で、西洋芸術論への意識・参照を確認できる。こうして近代の論者は、「氣韻生動」概念の新しい解釈へ迫っていったのである。

## 第二部会（Ⅱ 文学・語学部会）

Ⅱ-1 江戸期における中国戯曲の翻訳——嵐翠子『填詞胡蝶夢』について——

湯 書華（大阪大学大学院）

『填詞胡蝶夢』は嵐翠子が中国戯曲『胡蝶夢』から翻訳したものである。青木正児氏は藤井乙男氏旧蔵『填詞胡蝶夢』を翻刻し、『胡蝶夢』解題』でこの訳本の原作が『綴白裘』に収録される『胡蝶夢』と推測した。のちに石崎又造氏は『近世日本における支那俗語文学史』で国立国会図書館蔵『填詞胡蝶夢』の存在を提示し、それによって『填詞胡蝶夢』の成立時期（文化二年）を明確にした。さらに延広真治氏は「柳下亭嵐翠ノート」で嵐翠の事跡を詳しく考証し、彼と曲亭馬琴、及び名古屋の戯作者グループとの関わりを提示した。徳田武氏は『填詞胡蝶夢』と馬琴翻案作『曲亭伝奇花釵児』との関係を指摘した。

本発表では先行研究に基づき、『填詞胡蝶夢』の成立の背景と翻訳の特徴を考察していく。諸本の成立の背景については、国会本は貸本用の写本であり、貸本屋大惣を通して直接に、読者に提供されたものと考えられる。天理本は国会本の複写本であり、読者に提供されず保存用の写本として作られたようである。嵐翠は享和・文化頃に馬琴とお互いに影響を及ぼしあう中で、中国戯曲を翻訳する発想を起こしたと思われる。嵐翠は名古屋の戯作者グループや狂歌壇から影響を受けた可能性もある。翻訳の特徴については、まず絵入根本と似通っていることがあげられる。次に、中国語原文を保持して右側のルビによって訳すという翻訳者の中国趣味もみえる。なお、嵐翠子が『胡蝶夢』を選んで翻訳した理由の一つは、原作に表された無常の思想に共感し、無常の理を説くためと推測される。

## Ⅱ-2 「溝壑を填む」ということ——文天祥を中心に——

村田 真由（大阪大学大学院）

『孟子』滕文公下に「志士は溝壑こうかくに在るを忘れず、勇士は其の元かしらを喪うを忘れず」とある。「溝壑に在る」は、別の言い方では「溝壑を填むうづ」とも言う。これは、士たる者、自らの死を恐れずに忠義を貫くべきだという理念、『孟子』告子上の語を用いて言えば「生を捨てて義を取る」ことを善しとする理念を示したものである。この理念は、近代に至るまで東アジア全域に広く受け継がれてきた。

ただ「溝壑を填む」ることを恐れぬとはいうものの、人にとってやはり死は恐ろしい。事実「溝壑を填む」ということは、つねに『孟子』が説くような方向で語られてきたわけではない。自らの屍を野に曝すことへの恐れもまた少なからず語られてきたことには注意する必要がある。

このような揺らぎを持ちながら脈々と語られてきた「溝壑を填む」ということの系譜において、注目すべき位置を占めるのが南宋末の文天祥（一二三六—一二八三）である。文天祥は宰相として敵国モンゴルとの戦争に身を投ずるが敗れて囚われの身となる。モンゴルへの帰順を求められるが、宋王朝への忠義を貫いてそれを拒み、約三年を牢獄で過ごしたのちに処刑される。生涯を通じて、生命の危機に直面しつづけた人物と言つてよく、その詩には「溝壑を填む」ということが繰り返したわれている。

文天祥は死後、忠義の士として尊崇の対象となつてゆく。だが、そうして偶像化された文天祥像は、必ずしも彼の生身の姿と一致するとは限らない。「溝壑を填む」ということについて語つた言葉を見ても、『孟子』が説くような忠義の理念を堅く奉ずる言葉ばかりではなく、死の恐怖に直面して苦悩する心情や、さらには死の恐怖を「一笑」に付する達観の境地をうかがわせる言葉も少なくない。本報告では、それらの言葉の意味するところについて検討することで、ややもすれば偶像化の背後に隠されてきた生身の文天祥像に迫つてみたいと思う。

## II-3 陸游における田園と国家——「耕織図詩」「諭俗文」を手がかりに

浅見 洋二（大阪大学）

南宋の文人陸游は、その生涯の過半を故郷山陰の鄉村社会のなかで過ごした。出仕してのち、しばしば弾劾を受けて故郷に蟄居したほか、引退後も長い晩年の日々を故郷にて送る。このような生涯のなかから、「田園」をテーマとする数多の魅力的な詩が生み出されていった。

「田園」とはいかなる場であるのか。もちろん農耕の場であるが、中国の文人にとっては特に官界の対極に位置する「隱逸」の場でもある。仕官することを「代耕」と言うが、それに対する「躬耕」の場でもあるだろう。これは陸游の場合にもあてはまる。

「隱逸」にせよ、「躬耕」にせよ、基本的には皇帝や廟堂、すなわち「国家」から遠く離れる方向性にあつて成り立つ営みと考えていいが、事はそれほど単純ではない。中国の文人たちの精神世界に組み込まれた「国家」なるものの影がそう容易く拭い去れるものではなかったことは、多くの事例が示している。故郷に暮らす陸游の詩に噴出する憂国の情などは、その典型例と言えよう。

陸游の詩に表現された「田園」に「国家」はいかなる影を投じていたのか。ここで手がかりとして注目してみたいのは「耕織図詩」と「諭俗（示俗）文」である。「耕織図詩」は、南宋初の楼璿が稲作と蚕織の作業を工程ごとに一連の図に画き、詩を附したものである。南宋期に多く書かれるようになった。

陸游が「耕織図詩」に直接ふれていたことを示す資料はない。また、陸游の文集に「諭俗文」は収められていない。だが、陸游の田園詩のあちこちには「耕織図詩」や「諭俗文」に通ずるメッセージが示されており、共通する思想的基盤のうえに成り立つものであったことを十分にうかがわせる。本報告では、これらの作品との比較を通して、陸游とその詩における「田園」と「国家」の関連性について考えてみたい。

## Ⅱ-4 江淹「横吹賦」について——先行音楽賦との比較を中心に

西川 ゆみ（志學館大学）

六朝時代の劉宋から梁にかけて活躍した江淹は、模擬を得意とする詩人として知られる。本発表では、彼の「横吹賦」を取り上げ、江淹が先行の音楽賦をいかに受容し、改変したのかについて分析を行う。

「横吹賦」は、蕭道成が劉宋末の沈攸之の反乱を鎮圧する際に創作された。「横吹」は、軍樂を指す一方で横笛も意味する。「横吹賦」は、作中で軍隊に言及しつつも、基本的には横笛を描写対象とする作品である。先行する「洞簫賦」を始めとする音楽賦と比較すると、「横吹賦」は材料の産地を漢文化以外の異域（辺境）に設定する。さらに音楽賦が音楽の特性として取り上げる、音楽による教化を賛美する内容を、「横吹賦」は一切取り上げない。そして教化ではなく、「魂を感じ情を傷ましめて、賞を獲得ること彌いよ倍なり」、悲傷による感動によって賞賛を得る樂器であると述べる。また軍樂としての「横吹」は合奏であり、主要となる樂器は角笛であったという点を考え合わせると、「横吹賦」は軍樂「横吹」をあつかった作品としては、不完全な形で制作されている。音楽賦の伝統や軍樂の樂器編成という点から見ると、「横吹賦」は異質な特色を持っていることが指摘できる。これらの点から伝統的な樂教と辺境性との関わりについて、及び江淹の文學観について考察したい。

近年国内の江淹研究では、彼の神仙愛好に関わる論考が発表されているが、代表作以外の論考は依然として少ない。しかし代表作以外にも、本作のように当時の文學潮流に影響を与えた作品を、江淹は作り上げている。「横吹」を主題とする賦作品はそれ以前にはなく、その一方で梁陳時期には、樂府作品である「横吹曲」が盛んに創作された。梁陳の「横吹曲」が管樂器・筋に頻繁に言及し、悲哀の情を歌い上げる点からは、本作が梁陳文學に与えた影響がうかがえる。「横吹賦」の分析を通して、六朝期における江淹の文學史的位置を再考する足掛かりとしたい。

## II-5 漢魏六朝賦における「駢」について

林 曉光（大阪大学）

魏晉南北朝時代において「駢賦」が盛んに書かれるに至ったというのは、賦学の定説となっている。しかし、駢賦の定義について論者の着眼点は必ずしも一致しておらず、駢賦と見なされる作品の範囲も大きく異なっている。なかには論理上の矛盾が含まれる場合すらある。例えば、鈴木虎雄が定義した駢賦は長隔対を特徴とするものであるが、彼が「駢賦時代」と位置づけた時代の作品には、この特徴は必ずしも一般的ではない。しかし現状では、そのような矛盾点が見過ごされ、結論のみが漠然と受けとめられている嫌いがある。あらためて駢賦という概念が生み出され、賦の一ジャンルとして独立する経緯を考察し、その問題点を明らかにする必要がある。

賦の歴史を見ると、南朝の頃にはすでに厳格な対句によつて全体を構成する賦が出現している。これらを駢賦と見なし、この時期に駢賦が賦の一ジャンルとして成立したとするには十分な合理性が認められる。しかし、実際には南朝よりもかなり早い段階から、「駢」なる表現の成分を含む賦が少なからず見られる。論者によつて駢賦の認定に揺れが生ずるのは、「駢」の成分の濃度がどの程度の水準に達すれば駢賦と認定しうるかの基準が異なっているためだと考えられる。そうだとすると、駢賦の研究において重要となるのは、『楚辭』以降、各種の賦を構成する対句の表現形式とその歴史的形成過程を探究することなのではないだろうか。

駢賦に関する従来の研究は、主としてその成立時期や表現の美的効果に注目してきた。ジャンルとしての特徴を個別の表現から分析する研究が全くなされなかつたわけではないが、その多くは句式を分類・整理するに止まっているかに見受けられる。本発表では、表現形式における「駢」の成分に着目するかたちで、漢魏六朝の賦の歴史的展開について分析を試みたい。



### 第三部会（Ⅲ 日本漢文部会）

Ⅲ-1 題画詞から見た日本近世における填詞の受容について——野村篁園と田能村竹田を中心に——

陳 竺慧（大阪大学）

填詞とはその別称「倚声」の通り、元来は音楽に載せて歌うための韻文形式である。しかし、ジャンルとしての成熟にともなうて「声」⇨音楽を離れ、さまざまな形で作られるようになる。無声の絵画に題される作品、すなわち「題画詞」もそのひとつである。題画の詩に比べて数こそ少ないが、見過ごせぬ存在感を示している。

中国の題画詞は南唐後主李煜（九三七-九七八）の「漁夫」二首を始めとして、時代が下るにつれて着実に増えてゆく。『全宋词』に収められる題画詞は百六十首ほどであるが、『全金元詞』には百四十首ほど、『全明詞』になると五百首以上にも達する。詞が音楽から独立し、テキストとして鑑賞されるようになっていったことを反映している。

日本における填詞の受容は、古く平安朝の嵯峨天皇（七八六-八四二）の「雑言漁歌」五首にまで遡ることができるが、題名の通り雑言の楽府詩としてしか見なされていない。その後も填詞は試みられてゆくが、題画詞に関しては江戸時代中期の文人（南画）画家祇園南海（一六七六-一七五一）の題画梅「長相思」一首を待たなければならなかった。

嵯峨天皇から祇園南海に至るまで、題画詞の出現には八百年以上の時間を要したが、それはなぜか。ここには、日本における填詞受容のあり方が大きく影響していたと考えられる。この問題について考える上で注目される文人は野村篁園（一七七五-一八四三）と田能村竹田（一七七七-一八三五）である。篁園の詞には全百六十六首のうちに十首、竹田の詞には全七十四首のうちに三十首ほどの題画の作が現存する。彼らは、それぞれ官儒と文人画家の立場をもって、日本における題画詞の歴史に重要な画期をもたらした。本発表では、彼らの題画詞を取りあげながら、日本近世における填詞受容のあり方の特徴について若干の私見を述べてみたい。

### Ⅲ-2 文之玄昌自筆の詩文集について

上ノ原 怜那（九州大学大学院）

文之玄昌（一五五五-一六二〇）は、桂庵玄樹を祖とする薩南学派の一人である。島津氏第十六代当主島津義久を始めとし、生涯にわたって島津氏に仕え、外交に活躍した。日本への鉄砲伝来を記す「鉄砲記」に代表されるように、文之の詩文の多くがこれまで史料として利用されてきた。これらの詩文は、『南浦文集』に収録されている。

文之の詩文集である『南浦文集』は、写本・版本・活字本の三種が現存している。しかし詩文が史料として利用されながら、これら版本の系統や詩文集の構成は未だ明らかにされていない。現在、文之の自筆本としては、唯一、鹿児島大学附属図書館玉里文庫所蔵『南浦文集』二冊、『南浦戲言』一冊、『南浦棹歌』三冊の計六卷六冊があり、文之の詩文を利用する際の基礎資料となっている。本発表ではこの自筆本を取り上げ、詩文集の構成を考察することを通して、その成書の経緯を明確にすることを目的とする。

成書の経緯を考察するにあたって、自筆本が持つ二点の問題点に注目する。まず、自筆本六冊の体裁が一貫していると言えない点である。自筆本には後人による数字の書き入れが見られ、この数字を基に料紙を入れ替えることで、文之自筆の詩文集の原型が浮かび上がり、現在の六冊を「文集」、「詩集」、「戲言」という構成で三冊に分類することが可能となる。実は自筆本は改装されて現在に至っていたのであった。次に、詩文集の標題として「戲言」、「棹歌」という語句を採用した点である。「戲言」、「棹歌」という標題を採用した意図を探るとともに収録されている文之の詩文について考察することによって、三冊本が現在の六冊本に改装された具体的な経緯を確認したい。

文之の詩文には、制作年が不明であるものも多い。自筆本の改装内容や時期を明らかにすることで、詩文同士の関連も明確になる場合があり、制作年の特定にも繋がると考える。

### Ⅲ-3 山鹿流における楠木正成論——山鹿素行と吉田松陰から

武石 智典（筑波大学大学院）

楠木正成は、鎌倉時代末から南北朝時代にかけて南朝の後醍醐天皇に仕えた武将である。正成の活躍は、『太平記』をはじめとする軍記物語により実像以上に評価され伝播していった。先行研究で指摘されているように、江戸時代初期に編まれた『太平記秘伝理尽鈔』により正成は、単なる合戦上手の武将や南朝に尽くした忠臣という理解に留まらず、「智仁勇」の三徳を備えた者であり、為政者の範としての姿が創出され、他の諸将とは別格の扱いとなった。またこの評は、以降の正成像の形成に多大な影響を与えたとされる。

山鹿流は、甲州流や北条流に学んだ山鹿素行がはじめた兵学の一派であり、戦法を論じるのみではなく、治者たる士の在り方を説き、江戸時代を通じて広く波及した。素行はその著作の中で正成を礼賛している。その理解は『理尽鈔』に基づくものであったと考えられてきた。

ただその一方、山鹿流の正成観の形成を『理尽鈔』の論理ですべて説明し得るかといえれば疑義が生じる。なぜならば、素行はあくまで正成を武士として賞賛するのであり、職分を越えて論じようとする『理尽鈔』の考えとは距たりがあるからである。

本発表では、山鹿流における楠木正成論を考察するにあたり、併せて、山鹿流を家学として修めた吉田松陰の観点に着目する。具体的には、素行と松陰が正成について論及する資料から、『理尽鈔』の受容、両者それぞれの独自性、正成論の形成過程をみていく。加えて、この考察を踏まえて、山鹿流に共通する正成像を明示し、その成立背景について述べたい。

### Ⅲ-4 二松学舎大学所蔵資料井上哲次郎「支那哲学史」の特徴について——引用書を中心として

鈴置 拓也（二松学舎大学大学院）

二松学舎大学には、井上哲次郎が明治二十三年十月の帰朝後から翌年六月九日にかけて行った講義「支那哲学史」の講義録四冊が、三島毅及びその子復の旧蔵書からなる三島文庫に所蔵されている。該書は複数人によって記録されているが、記録者は不明である。しかし、中には朱筆で訂正されている箇所も見られるため、講義の定本を作成していた可能性も伺わせる。

井上の「支那哲学史」の講義録は、これまで彼がドイツ留学へ向かう以前のもの二点が紹介、翻刻されている。一方で、二松学舎大学所蔵の講義録は、ドイツから帰朝後に講じられたものであり、内容についても留学以前のものより詳細になっている。ただ、井上が如何なる書籍をもとにして講義をしていたかについて特定するのは難しい。

本発表では、これまで公にされていなかったこの「支那哲学史」について概略を述べるとともに、その講義で引用された書籍が何であったのかを推測し、また当時の東京大学で行われていた他の教員による講義との比較を通して、講義の特徴を考察する。

特に、井上が『老子』について講じた箇所では、老子の伝記を『史記』などによって説明する一方で、同時代の西洋人の研究も踏まえており、このような講義方法は帰朝者ならではのものではなかったといえる。また、彼は道教についても通史的に講じているが、それも出版されたばかりの那珂通世『支那通史』の負うところが大きい。

井上の東洋哲学史講義は、特徴として西洋哲学との比較などが挙げられ、明治二十年前後には彼のような研究方法は勢力があったが、狩野直喜は井上の講義に否定的であり、他方清朝考証学的な島田重礼の講義を好んだ。しかし、同時代的な視点で見れば、加藤弘之・西村茂樹、さらに市村瓚次郎の古典講習科卒業時の謝辞では、みな西洋の哲学概念や制度との比較を通じて漢学を「真の学問」へと発展させるべきだと述べており、井上の講義の特徴を考察することは価値がある。

特別講演会 現地調査（甘肅省・長崎・琉球など）による言語の研究

——あわせて宣教師・通詞（通事）による資料を考察する

講演 中 嶋 幹起（東京外国語大学名誉教授）

コメンテーター 瀬戸口 律子（大東文化大学名誉教授・東京国際大学客員教授）

講演者は、三十数年間、国立共同利用研究所の一つ、東京外国語大学付属のアジア・アフリカ言語文化研究所の一員であった。この研究所は、アジア・アフリカ諸地域を対象にして、言語・歴史・文化人類の三分野での、二次資料によらぬ現地での直接的研究がその目的であり、使命でもあった。「助手投入」と呼ばれる制度があり、助手は誰もが、まず二年間「現地に投入」された。言語では、記述言語学の基礎である音声学と音韻論をはじめ、分析の方法を修得し、言語構造の記述にすぐれた能力をもつ仲間が大勢いて、「未開発言語」の研究のために現地に向かっていた。言語には、こうした未知・未開発の言語研究に従事するほかに、集積したデータによる語彙集・辞書編纂の仕事があった。さらに、アジア・アフリカ諸言語を対象に、現地人講師を加えての「言語研修」が開催された。これにより、毎年、受講生を募集、言語習得のためのテキストを編纂し、夏季を利用して公開の集中講座を担当する義務もあった。

講演者の研究の出発点は、香港・東南アジアにあった。中国の開放体制の到来とともに、中国社会科学院の支援をうけて、諸言語・方言の現地調査ができるようになった。本講演では、中国の西北部、甘肅・チベット辺境地帯での言語調査についてまず述べたいと思う。この辺境地帯には、この地で生まれ、多年にわたって現地人の間で伝道事業に活動した米国人宣教師の足跡があったことは忘れがたい。講演者の言語研究の途上においては、中国各地、日本国内で、宣教師・通訳の活動のあとを見ることが少なくなかった。現代の状況を理解するためにも、かれらが貢献し残された資料を収集し、考察することは大切な作業と思う。史的研究では、北京・南京・長崎・

琉球に言及しながら、あわせて日本の外国語研究の黎明期についての知見を述べたい。

中嶋幹起先生のご講演の後、瀬戸口律子先生をコメンテーターとしてお招きして、専門的な立場からお話をお願いします。分野を超えて会員が集まる場として、皆様のご参加を心からお待ちしております。

司会 白田真佐子（愛知大学）

パネルディスカッション（次世代シンポジウム）

北京・上海における恋愛——一九二〇—三〇年代初期の小説を中心に

津守 陽（神戸市外国語大学） 司会者・講師者

林 麗婷（日本学術振興会外国人特別研究員）

小川 主税（大阪大学大学院）

○鄭 洲（神戸大学大学院） 代表者

本パネル発表では、中国現代文学史の中では左翼作家、新文学作家、通俗作家と区分されてきた作家の文学活動に着目し、小説の時間・空間から一九二〇—三〇年代初期の文学について再考する。具体的な考察対象となるのは胡也頻、廬隱、張恨水の作品群である。彼らは当時の文化の中心地であった北京や上海で旺盛な創作活動を行ってきた。とりわけ本発表では、一九二〇年代の青年男女の最大の関心事でもあった恋愛に焦点を当てて分析を行う。

①小川主税「北京の愛、上海の愛——胡也頻とその初期小説」

本発表は、一九二〇年代における胡也頻（一九〇三—一九三一）の小説について検討するものである。妻の丁玲（一九〇四—一九八六）とともに北京・上海を渡り歩いた彼は、一九三二年に国民党政府によって銃殺され、その生涯を閉じた。その悲劇的な死をもつて、胡也頻は政治的抗争に殉じた左翼作家として文学史上の地位を与えられている。しかし一九二〇年代の胡也頻の創作活動を振り返ってみたとき、そこに左翼作家としての側面はほとんど見られない。むしろ浮かび上がってくるのは、自己の経験と思しき恋愛を

作品に多数溶かし込んでいた作家胡也頻の姿である。その彼がモダンな恋愛をいかに描き出していたのか、丁玲との愛情生活も視野に入れながら若干の私見を述べてみたい。

## ② 鄭洲「二〇年代北京・モダン・恋愛——廬隱『象牙戒指』再読」

廬隱（一八九九—一九三四）の『象牙戒指』（一九三四）は、親友石評梅（一九〇二—一九二八）と高君宇（一八九六—一九二五）との悲恋を題材とした長編小説である。ヒロインのモデルは石評梅と考えられるが、作者自身の姿も見出すことができる。しかしそれ以上に特筆すべきなのは、悲恋小説としての側面が従来強調されてきた本作が北京の風物またはモダンと見なされる振る舞いを数多く写し取っている点である。小説の時代や舞台を想起させるこうした描写は、作中においてどのような役割を果たしているのか。また、日記や他者の語り、手紙文などが織り交ぜられた『象牙戒指』は、小説にどのような重層性をもたらしたのか。本発表では、以上の問題に着目したうえで『象牙戒指』を再読し、廬隱文学の価値を再考する。

## ③ 林麗婷「伝統と現代の狭間で——張恨水『啼笑因縁』と『金粉世家』を中心に」

本発表は通俗小説の大家とされる張恨水（一八九五—一九六七）の小説を取り上げ、旧女性、新女性の表象の方法について考える。具体的には、北京を主要な舞台とする『啼笑因縁』（一九三〇）と『金粉世家』（一九三三）に登場する様々な階層の女性（女中や知識人家庭の女性、官僚一族の令嬢など）が自由恋愛を求める過程で直面した問題に着目する。例えば、『金粉世家』のヒロインは自由恋愛を経て結婚したものの、まもなく夫婦関係の破綻を迎えることとなった。こうした人物造形を通して、張恨水の女性観に関する考察を行う。また、中国社会が伝統から現代を目指す際に、都市がどのような機能や可能性を有していたのかについても注意を払う。



## 小倉正恒と簡齋文庫（オンライン展示会）

本展示は、日本中国学会第七十三回大会が愛知大学を実施校として開催されることを機会に、愛知大学が所蔵する中国学関係書籍の中から、幾点かを紹介するものである。必ずしも稀見・貴重書のばかりではないが、これらによって愛知大学およびその図書コレクションの特色は知られるであろう。

本展示で特集するのは、小倉正恒の収集にかかる「簡齋文庫」である。小倉は、住友本社の総理事を務めるなど、戦前の財界で活躍した人物である。このコレクションは、通行和刻本や各種叢書を収めて通常の読書に備えるだけでなく、江戸期の未刊鈔本や朝鮮本などにも目を向けるという特色を持つ。それは趣味コレクションの域を大きく超えるもので、小倉の漢学の素養とアジア全体を見渡す見識を示すものと言つてよい。

小倉は南京で敗戦を迎え、戦後は政財界から身を引くが、最晩年には郭沫若文庫（後のアジア文化図書館）の建設委員長を務めるなど、中国との交流を重視する態度を一生貫いた。いつぼう上海にあった東亜同文書院は、敗戦によってほとんどの資産を失った。そのほかの外地所在教育機関の学生や教員が一体となって設立したのが愛知大学である。幸いに豊橋の旧陸軍師団跡に地を得ることができたが、学術資産はほぼ無きに等しかった。その状況にかつて東亜同文会の理事も務めたことのある小倉は支援の意を強くしたのかもしれない。愛知大学は、昭和二十三年小倉正恒より簡齋文庫を譲渡された。この時、簡齋はいまだ存命であり、その移譲は本人の意思に基づくものであった。設立時の愛知大学にとって、人的資源はさることながら、学術資源として、この簡齋文庫は、大学出発の際の大きな資産となった。

本展示によって、小倉簡齋の文化面での見識と業績、また愛知大学の特色が理解されるきっかけとなれば幸いである。

URL <https://taweb.aichi-u.ac.jp/cssj73/>

- (5) ZoomのID、パスコードを記したURLは、お申し込みのあった方に大会開催3日前までにメールでお知らせします。
- (6) 学会にメールアドレスを登録した方も、大会への参加は別途お申し込みが必要です。

#### (四) パスワードの扱い

大会特設サイトのパスワード、ZoomのID、パスコード等を外部に漏らさないようにしてください。Zoomの荒らし行為を防ぐため、Facebook等のSNSやその他のメディアに書き込むことは厳禁といたたく、ご理解とご協力をお願いいたします。

#### (五) その他

- (1) この大会要項の裏表紙にも要点がまとめられていますので、ご覧ください。書店のページも設置します。
- (2) 本大会に関する最新情報は、日本中国学会ホームページを随時ご覧ください。
- (3) 学会から一斉配信メールでお知らせすることもありますので、学会へのメールアドレス登録を済ませていない方は、この機会にそちらの登録もよろしくお願いいたします。

---

**【取扱注意】** 大会特設サイト用パスワード

参加申し込み  
研究発表資料

---

## オンライン開催について

第73回大会は10月9日(土)、10日(日)の両日、Zoomをツールとしてオンラインで開催します。

日本中国学会のウェブサイトにも、期間限定で会員のみがアクセスできる大会特設サイトのリンクを置きます。そのサイトで大会への参加申し込みを行ってください。研究発表資料も大会特設サイトにアップします。

具体的なアクセス方法は以下の通りです。

### (一) 大会特設サイト

日本中国学会ホームページ (<http://nippon-chugoku-gakkai.org/>) の「お知らせ」に「第73回大会特設サイト」へのリンクを置きます(9月上旬)。リンクに従って閲覧してください。なお、ページによってはパスワードが設定してあります。パスワードはこの記事の末尾に掲載してありますが、部外者の目に触れないように、ご注意ください。

### (二) 研究発表資料

研究発表資料はパスワード付きのページに、大会開催5日前から掲示します。研究発表資料の無断転載・再配布などはしないようお願いします。なお、特別講演会については資料の事前掲示を予定していません。

### (三) 大会参加申し込み

- (1) 大会参加申し込みのページはパスワード付きです。
- (2) 日本中国学会会員のみが申し込むことができます。
- (3) 参加費は無料です。
- (4) 参加申し込みは9月10日(金)10時から10月1日(金)23時までです(日本時間)。

# オンライン開催大会の参加方法

## 10月9日(土)・10日(日)

日本中国学会ホームページ  
(<http://nippon-chugoku-gakkai.org/>)



トップページ「お知らせ」



**第73回大会特設サイト**

9月上旬開設

### A. 会員限定ページ —パスワード入力が必要です—

大会参加申し込み <参加費無料>

9月10日(金)10:00～10月1日(金)23:00(日本時間)

研究発表資料

10月4日(月)～10月12日(火) <申し込み不要>

### B. 公開ページ

書店・出版社のページ

10月1日(金)～10月31日(日)

開催校企画・オンライン展示会

10月8日(金)～ <別サイトのリンクを設置>

---

〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町 1-1

愛知大学豊橋校舎文学部 白田真佐子研究室内

# 日本中国学会第73回大会準備会

E-mail [japansinology73@email.plala.or.jp](mailto:japansinology73@email.plala.or.jp)

---